ずなのに、おうぎおどりをしていた人は、けむりのように消えていなくなっていました。

そして、その日の午後、太郎蔵の息子の倉蔵が、外庭で仕事をしていると、「ウーン、ウーン。」と、人のうなり声がどこからともなくきこえてきました。気味が悪いので、声のするほうをあちこちさがし、最後に、土蔵の方からきこえてくるようなので、中に入っていくと、一人の老人が苦しそうにうなっていました。倉蔵が、おそるおそる近よって、「あなたはどなたですか。」とたずねると、老人は、「わしは、この家の福の神だが、この家の主人に弓でうたれたので、この家にいることができなくなり、社川の福井（棚倉町）に移ることにした。別れにひとことといっておく、おまえがこまるようなときは、いつでもわしをたずねてきてくれ。太郎蔵には弓でうたれたが、お前には何もされていないのだから……。」というと、消えてしまいました。

それから間もなく、太郎蔵は福の神のたたりか人のいやがる病気になり、あれほどさかんだった家も、たずねてくる人もなくなり、すっかりぼつ落してしまいました。